

Title	愛蘭土圓塔考
Sub Title	
Author	佐原, 六郎(Sahara, Rokuro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1940
Jtitle	史学 Vol.19, No.2 (1940. 9) ,p.73(275)- 118(320)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19400900-0073

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

愛蘭土圓塔考

佐原六郎

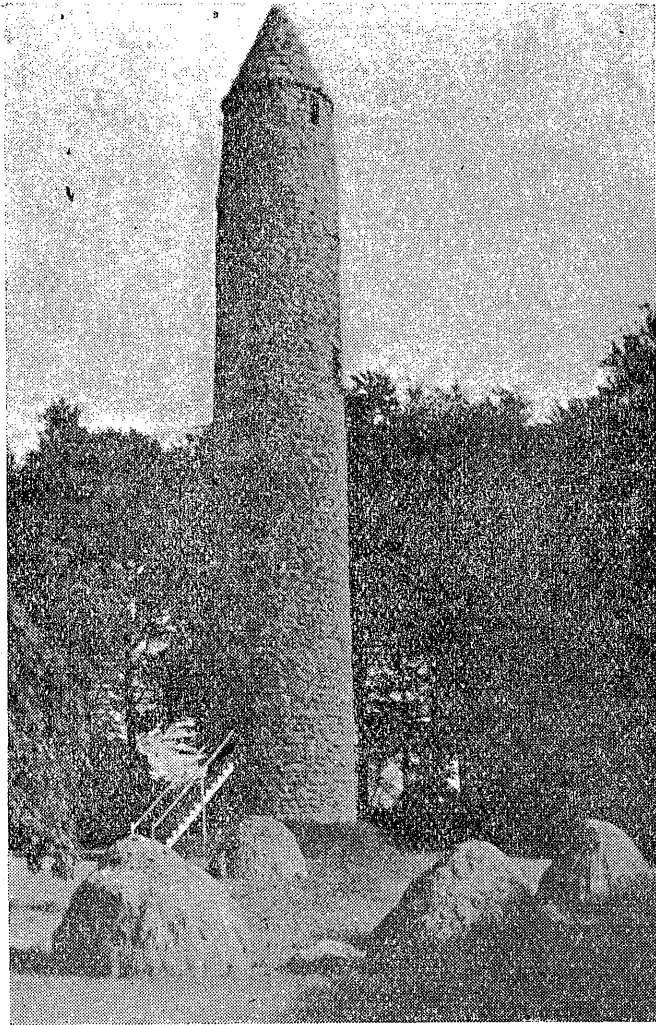
一、愛蘭土圓塔の構造的特徴

愛蘭土、即ち現エイレ國の古き由緒ある地方には今尙古色蒼然たる圓塔の遺存する處が少くない。勿論現存百十數基の圓塔の大部分は甚しく破損して僅に殘骸を留めるに過ぎないが、それでも約二十基は、近代に於ける修理を経て、略々原型を保持してゐる。さて茲に圓塔と云ふのはラウンド・タワーなる英語の譯語であつて、單に圓形の斷面を持つ塔を指稱するに過ぎないから、その意味での圓塔は世界到處に在ると云つても差支ないであらう。西洋のみに就いて云ふも例へば英國のウインザー城やコンウェー城、或は佛蘭西カルカソンヌの都市城壁等の城廓建築には望樓又は防禦用の圓塔が澤山に設けられてゐる。けれどもそれらは何れも鋸壁を以て物々しく固められ、然も城廓や城壁に附屬した塔であつて愛蘭土圓塔のやうな獨立的建築物ではない。又人はよくラヴェンナ聖アポリナーレ・イン・クラッセ寺に在る伊太利現存最古の圓形カムパニールを引き合ひに出して愛蘭土圓塔の起原をこれに求めやう

とする。けれどもラヴェンナの鐘塔は塔身の断面が圓形であると云ふ點以外には、窓でも、入口でも、又塔蓋でも全く愛蘭土圓塔とは趣きを異にしてゐて兩者の聯關を重視する事は困難である。今日愛蘭土圓塔に比較的近似したものととしてはアイル・オブ・マンのピールの塔、蘇格蘭土のエジェルシー、アバーネスィー、及びブリーキンの各一基の塔が擧げられてゐる。これらの塔が一部の學者の主張する如く愛蘭土圓塔の建設者と同一の民族によつて築かれたものとするればこの近似性も一應は首肯せられる。けれども少くとも寫眞を見た處では現存のアバーネスィー圓塔は塔蓋が圓錐形を爲して居らず、又ブリーキン圓塔の塔蓋は八角のスパイアーを戴くのみならず屋窓までも設けられてゐて、その外觀及び構造は何れも愛蘭土圓塔と可成り相違してゐるやうに思はれる。斯く比較してくると、その起原及び系統は兎も角として、愛蘭土圓塔は大體に於て同島獨特の建築物で、他の國々には殆ど見られざる著しい特徴を發揮したものと云へるのである。愛蘭土人が自國獨特の建物を概括的に示す場合、圓塔を以て代表せしめることのあるのもこれが爲めであらう。圓塔は實に、立琴又はうまごやしの葉と同様に、愛蘭土の象徴となつてゐる。

愛蘭土圓塔の中にも後述する如く多少の例外的特徴を示すものもないではないが一般に輪廓は平面圓形にして上へゆくほど僅に直徑を遞減し、且つ先端に圓錐形の塔蓋を戴く極めて平凡なものである。これは恐らく歐洲諸國に於て見られる多種多様の塔建築の中でも最も單純素朴な感を與へるものと云つて

もよいであらう。ダブリン大學の考古學教授 R・A・S・マカリスターはその著「古代愛蘭土」(一九三五年)に於てこの輪廓が塔の築造上次の二つの意味で頗る有利なるべきを主張した。即ち第一に圓塔には隅石を用ゐる必要がない。正確な角及び面を持つ隅石を作る必要のない事は塔築造上多大の勞力と費用とを節約せしめる。第二に圓塔は外敵に襲はれた場合でも、隅石なきため、外壁を築く積石を鐵挺を以て振り動かされたり破壊されたりする憂がない。他方又塔内に避難した防禦者もその圓形の輪廓の故に四方に開く窓から外壁を周覽することが出來、視界に入らざる壁面を持たない事になる。従て一朝有事の際に於ける防禦上の目的にも頗る好適である。以



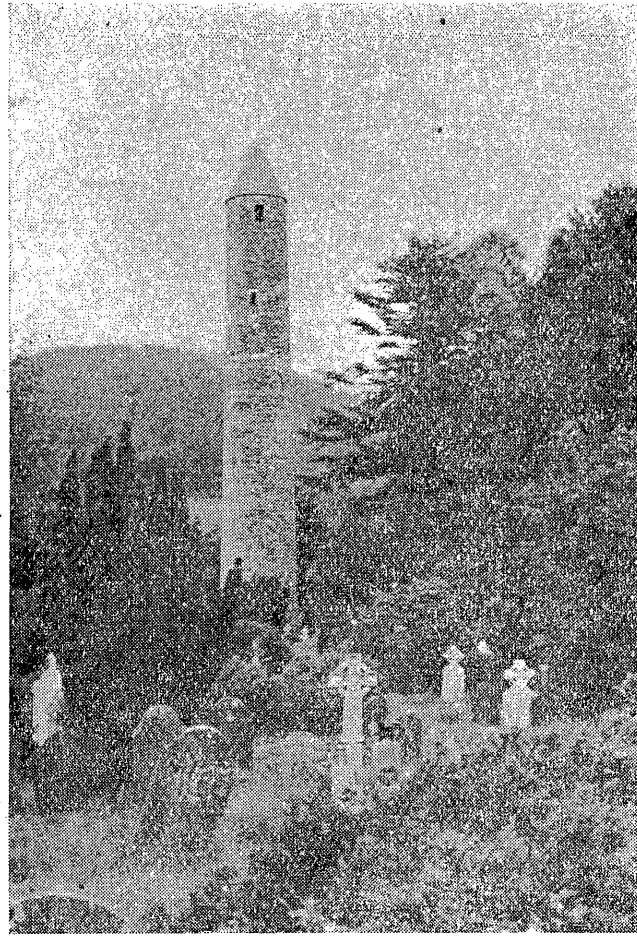
ア ン ト リ ム 圓 塔

上二つの長所は更に一種の流行と結びつき愛蘭土に於ける塔建築の定形の普及と永續とを促したのである。マカリスターのこの主張は彼以前の諸學者の間にも既に唱へられてゐたものであつて一般に妥當と認められてゐる。事實愛蘭土に於ける古き塔は皆この圓形プランを踏襲して居り、僅にケーシエルの

コルマック禮拜堂(一一三四年ミンスター¹の聖王が獻堂せるロマネスク建築)が一對の方形塔を持つて例外を示してゐるに過ぎない。又J・ファーガスン(古代中世建築史、一八九三年版、第二卷)に依れば圓形プランを用ゐながらその下部のみを八角にした塔が最も珍しき異例としてヨーク郡キンネーに

於て見られるとの事である。

圓塔の高さは別に一定してゐない。私の見學した二つの圓塔の中、アントリム²のものは九三呎、グレンダロウ³のものは一〇三呎であつた。現存圓塔中最高のものは一三二呎で、キルカラン⁴に在る。尙グレンダロウ圓塔に於て塔身の一番太い最下部は外徑約一六呎、内徑約八呎一〇吋あり、又塔蓋のすぐ下の一番細い所では外徑約一三呎七吋となつてゐる。



グレンダロウ圓塔

以て塔身の外壁傾斜の程度が窺はれやう。又塔の基礎は頗る簡單で、地下には先づ深さ二呎位の根積層があり、その上にこれも地下に隠れて見えないが夫々深さ一二吋、幅六吋、及び深さ一〇吋、幅四吋半の二段の壁段が設けられ、以て上部の高き塔身を承けてゐる。

入口は愛蘭土圓塔の研究上最も興味深き部分で、何れも地表面よりも遙に高い處に設けられてゐるか
ら外部から梯子を掛けなければ達せられない。グレンダロウの塔に於ては地表面から入口の臺石の表面
まで約一呎六吋、又アントリムのは六呎であつた。而して地上六呎と云ふのは圓塔の入口としては最
低であつて一般にはそれよりも高く、一〇呎乃至一八呎が普通である。但しキルマックドウ圓塔の入口
は地上二六呎の高處にあつて、これが現在では最高の實例である。斯くの如く入口が一般に高處に設け
られてゐる事は後述する如く圓塔の用途の考察上重要な暗示を與へるものとされてゐる。尙圓塔の入
口は何れも一箇處のみに作られ、然もそれが附近に現存するか或は又嘗て附近に存在した教會堂や僧院
の入口と向ひ合ひに設けられたものだと云ふ事も特に圓塔を以て基督教的建築物だと主張する人々の強
調する所である。

圓塔の入口はその上方に點在する若干の頗る簡單な窓に比して稍々複雑な構造を示してゐる。例へば
グレンダロウ圓塔に就いて見るならば入口は大きな臺石の上に大小數個の石を積み重ねて高さ五呎六
吋、幅は最下部で二呎、上部のアーチ形の所で一呎九吋ある開口を作つてゐる。下の水平面を有する臺
石と拱形に加工された上枠の石とは共に花崗岩で何れもその部分の塔壁の厚さと同じく約三呎三吋の奥
行を持つ。又この開き口の兩側で一直線に切りそろへられた抱石は、一個の比較的に小さなものを除き、
何れも花崗岩でこれまた塔壁の内側まで達してゐる。グレンダロウ以外の圓塔に於ても一般に入口だけ

は特に硬質の石材を用ゐて念入りに作られてゐるやうである。但し入口の上枠はグレンダロウ圓塔の場合のやうに必ずしも拱形を爲してゐるとは限らない。例へばアントリム圓塔の如きはその入口が他の窓と同様楣式構造となつてゐて頗る單純である。

一般に圓塔には地下に隠れた基礎の部分を除き人の目に觸れる塔の外壁に壁段や持出を設けてないで、もし各階層に開かれた窓がなかつたなら、階層そのものの存在も外部からは知り得ないのであらう。けれども階層の存在せし事は塔の内壁に各階の床張りをするため使用された梁穴の残つてゐるので明に推定出来るのである。而して床は何れも板張りであつたから早く朽ち果て、現存の板床は皆近世の再修である。但しキャスルダーモート、ミールック、及びキネース等に遺存する少數の圓塔に於ては入口のある第一階だけ石の床を張つてあるのでこれは初建時代のものそのまゝであらうと考へられる。

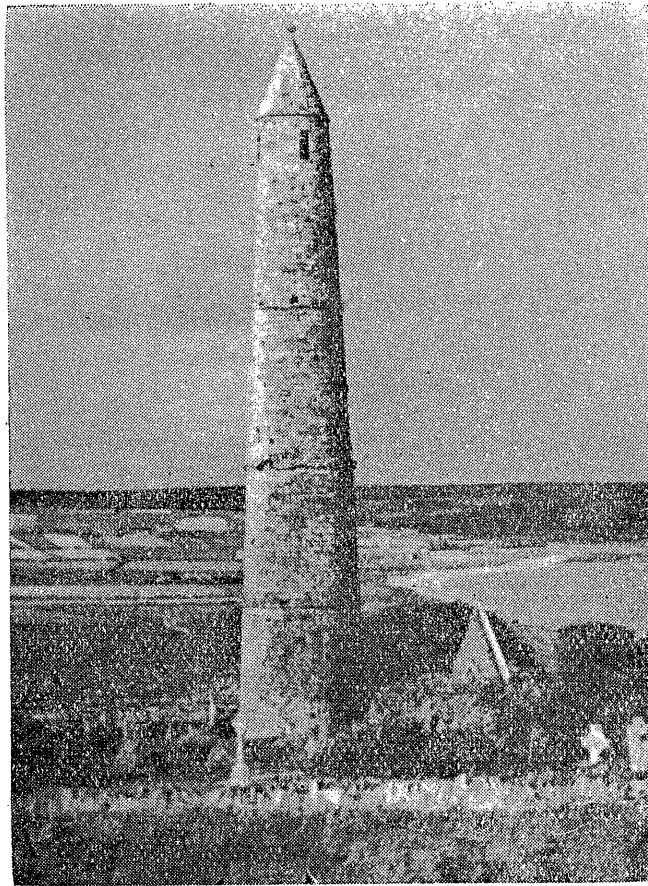
圓塔の窓はその構造の簡單であること、特殊の配置を爲すこと、に於て注目に價する。グレンダロウ圓塔について見れば二階の窓は南面、三階では西面、四階では北面、五階では東面と云ふやうに夫々互に直角を爲して大體方位基點に近い方向に一個づゝ開いてゐる。又これらの窓はたゞ恰好の適した石を選んで積み重ね、高さ一八吋、幅一〇吋程の開口を作るに過ぎぬ極めて素朴なものである。第六階、即ち最上階に於てのみは四つの稍々大きな窓が夫々方位基點に近い位置に設けられてゐる。斯くの如く最上階に四個、他の階層に夫々別の方位に面する一個づゝの窓を開くのが愛蘭土圓塔に於ける原則的慣例

である。尤も例外としてドノモア、クロマックノイズ、キルケニー、ケルズの諸地方に夫々無窓、八窓、六窓、五窓の最上階を持つ圓塔もあるが、他の圓塔は何れも原則に従てゐる。窓は一般に簡単な楣式のものであるが稀に半圓拱式又は合掌迫持式のものも残つて居る。尙入口に於けると同様に窓もその開口の上部が下部よりも少しく狭く、抱が傾斜してゐる事は特にノルマン建築の塔との區別を示す重要な特徴と考へられてゐる。

圓塔の屋蓋は皆圓錐形切石積で、陣笠形を爲し、塔身と同じ石材で作られ、且つ上の石が下の石に少しづゝ重なるやうに持送りとなつてゐる。たゞ一つキルケニー郡キルリーの圓塔のみは圓錐形の塔蓋を保持せず、城廓の圓塔のやうに先端を鋸壁を以て固めてゐるが、これは勿論後世の改造で當初のものとは思はれない。又ダブリン市のグラスネヴィン墓地には愛蘭土の志士として同國人崇拜の的となれるD・オーコンネルを記念する高さ一六〇呎の新しい圓塔が立つてゐるが、これは粗石ではなく煉瓦のやうに切りそろへられた同形の石材を規則正しく積み重ねて築いたものであつて愛蘭土圓塔特有の感じは出てゐない。その上圓錐形塔蓋の先端に高さ八呎ばかりの十字架を戴いてゐる。歐洲諸國の教會堂尖塔に於けるが如く十字架を戴くことは、少くとも愛蘭土の古き圓塔には有り得ないことであつた。

圓塔構築の石材は、地方に依て多少の相異なるも、主として、砂石、石灰石、雲母片岩、花崗岩等である。稀には赤味を帯びた方形の煉瓦に似た人工的材料の使用されたものもないではない。而して入口

や窓のやうに多少細工を要する部分にだけ硬質の花崗岩を用ゐること多きは既述の通りである。圓塔は大概その附近に於て集められた自然の粗石をそのまま、大して面を取つたり角を作つたりせず、積み重ね粗悪な漆喰で固めて築いたものである。従てそれらの石塊は大小厚薄様々であるが、然も初代の圓



ア ル ド モ ア 圓 塔

塔築造者はこれらの粗石を巧みに利用してタスカン式圓柱を想はせるやうな單純にして均齊のとれた塔身を立てたのである。

圓塔の中には可成り遠方から運ばれた石材を使用して建てられたものもあるらしい。例へば R・R・ブラッシュ（第十二世紀までの愛蘭土宗教建築、一八七五年）の調査によると、アルドモアの圓塔は同地から五哩も離れたスリーヴ・グライアンの山岳地コーランから切り出された淡褐色の砂石を以て築かれたものである。而して此地方の傳説によるとこれらの石材は車も馬も用ゐずに運搬され、然もハンマーの音一つ聞えることなしに圓塔が築かれたと云ふ。ブラッシュはこの傳説を解釋して、石材は豫めスリーヴ・グライアンの採石場で準備され、そこからアルドモアまで多勢の

人々が塔列しては順次に石片を手から手へと渡して運んだことを意味すると云つた。勿論アントリムやグレンダロウの圓塔の場合のやうに、到底一人の力では動かし得ない程大きな粗石を含む塔に就いてはその石材を手渡して運ぶことは不可能であるが、このアルドモア圓塔は比較的によく揃つた割合に規則正しい形に切り整へられた石を八寸乃至一二寸の高さの層に積み重ねて築いたものであるから、ブラッシュの云つたやうな想像も可能となつたのであらう。アルドモア圓塔は以上の如き點で他の多くの圓塔と異なる例外的特徴を示すばかりではなく、更に他の著しき一變異を示してゐる。即ちこの塔は高さ九呎四寸の塔身外壁を三段の蛇腹帶で四つの異なる高さの層に仕切つてゐる。この外壁面に少しく隆起した三つの帶の存することこそはこの塔の最も珍しき特徴であつて、かゝる例はこれ以外愛蘭土の圓塔中に一つも見られないのである。

二、愛蘭土ロイヤル・アカデミーの懸賞論文

圓塔は一種の神祕的な存在として愛蘭土に於ても久しくその起原及び用途に關する定説なく甲論乙駁の状態が續いた。そこで一八三〇年の十二月にロイヤル・アイリッシュ・アカデミーは圓塔に關する定説を決するため懸賞論文を募集することになつた。

今日圓塔の起原及び用途に就いての代表的な主張と認められてゐるのはジョージ・ピートリー（一七

九〇—一八六六年)の圓塔基督教的起原説である。又これに對立し基督教的起原説の誤れるを論證せるのみならず敢然異教的起原説を唱へた人はヘンリー・オーブライアンであつた。而して兩者ともロイアル・アカデミーの募集に應じて論文を提出し且つ當選したのであつたが、この論文の審査に就いてオーブライアンはその公正を疑ひ、從て一等當選のピートリーの所説を以て定説と決するの妥當ならざるを主張した。以下少しくオーブライアンの言ひ分を述べ合せて論文募集及び審査の過程を説明して見やう。

アカデミーは一八三〇年の募集に於ては遂に適當な論文が得られなかつたので更に一八三二年二月二十一日附廣告を以て次の如き募集條件を公表した。

(1) 本會は愛蘭土の圓塔を研究し現存のすべての圓塔に就いて建築上の特徴を明にし、且つその起原及び用途に關する從來の疑問を一掃するに足ると認めたる論文に對しては金五十磅と金牌一個とを贈呈する。

(2) この問題に關して更に新しき論文を受理し得るため、又既に論文を提出せる各位に對してはそれを修正又は増補するの機會を與へるため、締切期日を一八三二年六月一日まで延期する。

これより先、論文募集に就いての第一回の廣告ありし事を知らずにゐたオーブライアンはこの第二回目の廣告の發表される數日前に始めて論文募集の件を知つて、直ちにアカデミーの事務官の一人なるマ

ック・ドンネルを訪ひ、自分は圓塔の神祕を明にする論文を提出したき希望を持つがまだ間に合ふかと尋ねた。然るに同事務官は不用意にもその問題に關してアカデミーは既に解決が着いてゐると答へた。

この解決と云ふのは當時アカデミーの一會員たりしピートリーが同じくこの問題に對する論文を提出し、且つそれが入賞することに内定してその基督教的起原説が會員間に支持されてゐた事を意味するものであつた。けれどもこの會見の後上述第二回目の廣告の發表されたのを見たオーブライアンは大に喜び切迫せる締切を前に日夜不眠不休で執筆、漸く期日まで論文をまとめてアカデミーに提出した。

その後再び延期された締切期日も過ぎて多くの論文の出揃つた頃、ダブリン・ペニー・ジョーナルと云ふ名の雑誌がアカデミーの論文審査員等指導の下に發刊される事となり、ピートリーもその有力なる指導者となつた。さて論文提出締切日の終つた次の土曜日發行のペニー・ジョーナル第二號にテランス・オートウールと云ふ筆名の下に審査員の一人なるシーザー・オートウエーが次の如き記事を書いた。

「圓塔は誠に考古學者にとつての一大難問題である。その起原と用途とを説明するために塔の高さにも劣らず堆く積まれた多くの紙が、リフェー川を流れる満々たる水にも比せらるべき無限のインクを以て染められた。けれどもこれらの賢明にして且つ深遠なる論文も臆て間もなく完全に放棄せられ、圓塔の眞の性質はダブリン市の卓越せる一考古學者のアカデミーに提出した懸賞論文によつて初めて説明し盡されるであらう。」

この記事に卓越せる一考古學者とあるのは云ふまでもなくアカデミーの會員であり、その上論文審査員の一人なるピートリーのことであつた。さて論文の審査はオーブライアンの提出せる廣汎なる論文のために豫定の三ヶ月を経ても完了せず、六ヶ月目に漸く終つた。然もピートリーに豫約された賞金を動かすわけにもゆかず、さりとしてオーブライアンの優れた研究を無視するわけにもゆかず、遂に廣告には全く豫告されてゐなかつた別個の賞金を作つてこれをオーブライアンに贈呈することゝなつた。即ち一八三二年十二月十七日附を以て金五十磅と金牌一個とをピートリーに、又金貳拾磅をオーブライアンに贈る旨の發表があつた。斯くてオーブライアンは研究の優秀なるを認められながら金貳拾磅と云ふ應急的な賞金を得たゞけで、五拾磅と金牌との外に尙ロード・クロンカリーと云ふ篤志家の個人的に提供した金百磅の賞金はピートリーの獲得する所となつたのである。

この懸賞論文事件は單に賞金に關する問題としてではなく重大なる學說上の問題として看過し難きものであつた。若しオーブライアンの所説がピートリーの所論と同様に圓塔基督教の起原説であるか、或は少くとも根本に於てそれに近いものであつて然も兩者の間に優劣の差が認められると云ふのであれば問題は簡單である。けれども兩人の學説は互に對角線的に相異せるものであり、又この論文募集は圓塔の起原及び用途に關する定説を作るためのものであつた事に於て、兩者の入賞は却つて疑問を深め、何れを眞と爲すべきかを迷はしめるやうにも思はれる。オーブライアンは論文提出者の一人なるピートリ

「を審査員中に加へたアカデミーの不正を指摘し、且つ自説の飽くまでも正しき事を主張したが、アカデミーの學界に於ける信用を重んじ、且つカトリック的基督教の信仰強き愛蘭土人が一般にピートルの圓塔基督教的起原説を迎へ、オーブライアンの異教的起原説を喜ばなかつたのは止むを得ざる、寧ろ當然の現象であつたとも云へやう。

三、圓塔初建の時代に關する三説

愛蘭土に渡來せる基督教が弘く一般に信奉せられ各地に教會堂や僧院の建てられるやうになつたのは第六世紀頃と認められてゐる。圓塔を以て教會堂又は僧院の附屬建築物と見做したピートルは圓塔も亦第六世紀から第十三世紀までの間に建てられたものと主張した。扱て愛蘭土に於ける基督教布教の歴史を見るにその最初の傳道功勞者はペラギウス(二六〇—四四〇年)とパトリック(三八七—四九三年)とであつた。羅馬法王がペラギウスに與へた委任の言葉「基督を信する愛蘭土人へ」(ad Scotos in Christum credentes)を以てペラギウスの愛蘭土に於て僧正となる以前既にこの島に基督教の善き種の蒔かれてゐた事の證明であると爲す説もあるが、然しペラギウスの布教後と雖も一般には尙在來の邪神崇拜が行はれ、現に聖パトリックが傳道を開始した頃でも國王ラオグヘイアはタラの丘で異教的祭禮を營んでゐたと云ふ。聖パトリックの愛蘭土語による熱心なる布教は應て多數の改宗者を出し、こゝに基督教は非常

な勢を以て普及するに至つた。この時代にはじめて *cella* (羅典語の *cella* より出た語)、即ち聖所又は小禮拜堂を意味する接頭語を附けられた地名が出来、更に後世益々かゝる地名の増加したことは何れも基督教の影響を示すものと見て差支ないであらう。現在圓塔の遺存する地方のみに就いて見ても例へばキルカラン、キルアラ、キルマロツク、キルマツクドウ、キルレー等の地名がその實例として擧げられる。換言すれば少くとも第六世紀には愛蘭土の處々に小教會堂の建てられた事がこれに依ても知られるのである。

そこで問題は圓塔がこれらの教會堂と同時に新しく建てられたのか、或は又既に古くより存在してゐて、その附近に新しく教會堂が建てられるに至つたのかと云ふ事である。もし圓塔を以て教會堂又は僧院の附屬建築物だと見做すならば、その建設された時代もピートリーの主張する如く第六世紀及び以後となるわけであり、又もし基督教の僧院や會堂の建てられる以前に圓塔が既に存在してゐたとするならばその初建の時代は遙に古きものとならなければならぬ。斯くて圓塔初建の時代に關しては第六世紀と爲す説とそれ以前と爲す説とが分たれるのである。然るにこの外に尙圓塔を以て第十二世紀の初建だと爲す説もある。この第十二世紀説の根據はケルト系愛蘭土人が第十二世紀以前には未だ石材と漆喰とを用ゐる建物を一つも持たなかつたと説く消極的主張である。成る程多くの建築史家は第十二世紀以前の愛蘭土では宮殿でも僧院でも皆木造又は土壘に過ぎなかつた事、而してノルマン式又は初英式の

石造建築が此の島に建てられるやうになつたのは第十二世紀末であつた事を認めてゐる。けれどもそれだけの理由で圓塔の初建を第十二世紀と定めることは早計であらう。現に「古代愛蘭土の塔と殿堂」(一八六七年)の著者マーカス・キーンは第十二世紀以前に石造建築の經驗なく且つ石造建築を公然輕蔑してゐた愛蘭土人がいきなり最初の企に於て圓塔の如き巧妙な石造建築を斯くも多く建て得るものとは考へられないと云ひ、又古代愛蘭土石造建築の最も美しき實例の若干は第十二世紀よりも遙に古き時代に存在し、中には早くも第五世紀頃のものゝと推定出来るものもあると主張したピートリーの説に贊成してゐる。

以上の如く圓塔初建の年代については三つの説が現れたのであるが、これに關聯して如何なる住民が之を建てたかの問題が起る。嘗てジョン・リンチと云ふ人は圓塔を以てデーン族の建築せるものだと主張した。けれどもデーン族がはじめて愛蘭土に侵入したのは八三八年であつて、彼等が圓塔の建設に關係なきはピートリーもオーブライアンも共に主張した所である。オーブライアンに依ればデーン族の支配は愛蘭土に於てよりもブリテンに於て長期に且つ廣範圍に亘つた。然るにそのブリテンに圓塔及びその遺跡すら残つてゐないのに愛蘭土にのみそれが多いのは不思議である。そのみならずデーン族の原住地たるスカンディナヴィア地方には圓塔に比せらるべき建築物は一つもない。之に反して愛蘭土ではデーン族の支配の一度も及ばなかつた地方や州に於てさへも圓塔を存してゐるのであるから、愛蘭土人がわざわざ野蠻な侵入者たるデーン族の慣例を模倣してかゝる塔を隨所に建てたとは考へられない。特

に愛蘭土でもデーン族の勢力の最も強かつたウエクスフォード及びウオーターフォードの地方には圓塔らしきものの根跡すら認められないのであるから倒底圓塔デーン族起原説は成立し得ないと斷定されたのである。

次に圓塔はアングロ・ノルマン族の建築だと主張する人も少くない。所謂ノルマン期（一〇三六—一八九年）の建築様式の一特徴たる半圓拱は圓塔の入口や窓の構造にも見られないではない。けれどもこの類似は兩者を結びつけるべく餘りにも貧弱な根據であり、他方幾多の相異點を擧げること依て兩者の關係を稀薄化することも出来る。例へば圓塔の入口や窓に半圓拱ではなく楣式の實例の少くない事、又マーカス・キーンも指摘したやうに、ノルマン式の入口や窓に於ては何れも抱が平行垂直であるのに圓塔のそれは平行ではなく少々傾斜してゐる事等も注意すべきであらう。斯くてキーンはノルマン建築と愛蘭土圓塔との關係少きこと恰も希臘の殿堂と英國の劇場との間の如しと云つてゐる。

ピートリー等の立場から云へば圓塔は矢張りケルト族の建てたものと見做さるべきである。けれども圓塔を以て第六世紀以前の古き異教的建築物なりと主張する人々はこれをフェニキア人、波斯人、シシアン人等に歸せしめ、特にオーブライアンはダナン族に發したものと見做した。

四、圓塔拜火教殿堂説

波斯と愛蘭土とが古き時代に密接な關係を有せしことは種々の方面から説かれてゐる。オーブライア
ンに従へば愛蘭土の最も古き名稱は Iran 又は Irin で、これに接頭字 E を附した Eirian 又は Eirin は
その一層正しき綴字であつた。このことを古記録によつて示せば、先づ紀元前五〇年頃シシリーのデイ
オニシウスは愛蘭土を指して Irin と呼び、又一〇九八年に書かれた宗教史の中でオーデリウス・ヴイ
タリスは愛蘭土人を Irenses と呼んだ例があると云ふ。この Irenses は Irenians と同じく Iran, Iren 又
は Irin の住民を意味するものであつた。他方又波斯はその住民によつて Iran と呼ばれ、E を附して
Eiran と稱せられた。かくて愛蘭土も波斯も共にイランと呼ばれ Eiran と變化せる名を有せしことが
知られた。然らばこのイランと云ふ名稱の字義はどうであつたらうか。これに就いては種々の意見があ
り、ジョン・マルコルム卿はイランを Eiri の複數と考へて信徒等の國を意味すると爲し、又オーブライ
アンは Eir 即ち神聖なると、An 即ち領土との複合で、つまり神聖なる領土を意味したと述べ、然も
An は陸地、In は島を意味したから、陸地たると同時に島である愛蘭土はイランともイリンとも呼ばれ
たが、陸地にして島にあらざる波斯はイランとのみ云はれたと主張した。今これらの説の當非に就いて
は言語學上の研究と知識とを缺く私の論議し得る所ではないが、ヴァランサー、ビューフォード、ドル
トン、ハンウェー等の學者は單に名稱の上のみならず民族及び宗教に於ても愛蘭土と波斯との間に密接
なる關係があり、更に愛蘭土圓塔は結局波斯に行はれてゐた拜火教の殿堂であつたとさへ説くに至つた。

この圓塔拜火敎殿堂説に對してはピートリーも反對したが、オーブライアンも亦次の如く論じて之を否定した。成る程多數にある愛蘭土圓塔の中には聖火を燃やしたと想像せられる痕跡を留めるものもな
いではない。今假に圓塔が絶えず不滅の火を燃やした殿堂だつたとして、その火は一體塔内の何處に置
かれたものであらうか。もし入口のある初層の床の上であつたとすれば、第二、第三等上部階層の床板
の焼ける危険があり、又最上階に於て四方に開く窓も煙の流出口として役立たなくなつて了ふ。尤も内
部に床張りをするとき利用される梁穴を持たざるアルドモア圓塔の場合には塔内に三階四階等の板張り
なく、従つて煙も遮られることなしに自由に上昇して最上の四窓から吐き出されたらうと推測されな
でもないが、それにしても絶えず火を燃やしたことを證據立てるやうな黒く煤けた所など塔内に少しも
残つてゐないのが不思議である。又例へばドウラムボーに遺存する圓塔のやうに煙のために陶ワイトリフテイ化せる
が如く見える内壁を持つものがある。或研究者はこれを見て「此の塔の内部では嘗て頗る強い火が燃や
されたに違ひない。その證據には塔の基底に近い内壁の表面が硝子のやうに陶化してゐる」と述べたと
云ふ。乍然この一例を以て直に圓塔拜火敎殿堂説が成立し得るものとは考へられない。何故ならば斯る
陶化の痕跡を留めざる他の多くの圓塔の存在こそは却つて聖火を燃やすことが圓塔の目的ではなかつた
ことを實證するからである。又次のやうな事實も傳へられてゐる。即ち四六七年に基督敎の尼僧となつ
た聖ブリヂットは改宗以前に通曉してゐた聖火に關する異敎的儀式を全然廢止するのを惜んで拜火の風

習をそのまま保存せんと欲した。而してこの尼僧が基督教への改宗後尙聖火を燃やし續けた場所は圓天井のある地下の小屋であつて決して塔の中ではなかつたと。更に又ビード師はグースベルトの傳記の中で、愛蘭土には古代の異教的遺跡たる聖火奉安場の多く存在してゐた事を述べ、次いでそれらは何れも波斯人の所謂 *Atash-gadh* に似たものでアルドモア、キラロウ、ケリー、ケルズ、ダウン等愛蘭土の處々に見受けられる屋根の低い石造建築物であつて決して圓塔ではないと云つた由である。

以上の如く圓塔拜火教殿堂説に不利な説は多く擧げられてゐて結局圓塔を以て拜火教的建築物だと見做すことは甚だ困難となつてゐる。

五、オーブライアの圓塔論

H・オーブライアンは一八三四年倫敦に於て「愛蘭土の圓塔」なる著書を出版した。これは先に述べた愛蘭土ロイヤル・アカデミーに提出した懸賞論文を増補詳論したものでピートリーの見解とは正反對の結論を示してゐる。而して圓塔に關する乏しき文獻の中でもオーブライアのこの書は最も廣範圍に亙つて圓塔の起原と用途とを考察したものであり、東洋に於ける拜星教及び陽物崇拜の研究を爲し、それと圓塔との聯關を説き、又圓塔そのものの原名を究明して異教的起原説を主張した點に於て頗る異色ある書物である。彼の主張の最も重要な點は結局圓塔を以て印度方面から愛蘭土へ古く殖民したダナ

イン族の建てた拜星教的陽物崇拜の塔であつたと説けることである。勿論彼のこの大膽なる結論には甚しき空想的な部分や牽強附會の臆説も含まれてゐるのであるけれども、圓塔異教的起原説の一例として最も興味深き論述である。

さて愛蘭土圓塔は普通にラウンド・タワーなる英語を以て呼ばれてゐるが、そのゲール語の名は後に詳述する如く *cloicheach* であり、鐘樓を意味したものである。けれどもこの名は圓塔が鐘樓として使用されるやうになつてから出來たものであつて、それ以前に果して如何なる名稱で呼ばれてゐたかは疑問であつた。然るにオーブライアンはこの點に就いて面白い説を唱へた。彼によれば愛蘭土の古記録たる四首長年鑑 (*The Annals of the Four Masters*) は九九四年落雷のため破壊されたアルマーの町に關し次の如く記録してゐる。即ち「アルマーは落雷で火災にかゝり、その住宅、寺院、*cloicheach* 及び *Fiadh-Neimhedh* 等は何れも破壊されて了つた」と。同一の事件は又アルスター年鑑 (*The Ulster Annals*) にも次の如く記載された。即ち「アルマーを襲ひし雷は非常に激しかつたので、邸宅も、寺院も、*Erdam* も、*Fidh-Neneed* も悉く破壊せずには置かなかつた」と。オーブライアンはこの兩年鑑に於て夫々 *cloicheach* 及び *Erdam* とて異なる名で呼ばれてはゐるが實は同じく鐘樓を意味した言葉の外に *Fiadh-Neimhedh* 又は *Fidh-Neneed* と綴られた別の言葉の存するを見てこれに特別の注意を拂ひ、これこそは愛蘭土圓塔の原名であると推定した。然らばこの言葉は何を意味するものであらうか。オーブライアン

によれば、ユルガンと云ふ人はこれを塔タウと英譯し、又オーコンノールと云ふ人は指時計ノイモンと譯して太陽に照らされた塔が地上に投げる影によつて時間を計る指標の意味にしたが、これらは何れも不正確である。四首長年鑑で *Fiadh* と書き、又アルスター年鑑で *Fidh* と表した言葉は元來 *Budh* 即ち隣伽の複數で、前二者の頭字 F は後者の頭字 B の氣息音に過ぎず、從て F の代りに B を以てしても差支ない。又 *Nemheda* 又は *Nemeed* は天體を意味する *Nemph* と云ふ語の形容詞で、神聖なるとか聖別されたとかを意味する。それ故これら二語を結合した *Fiadh-Nemheda* 又は *Fidh-Nemeed* は神聖なる隣伽の意となる。オーコンノールがこれを指時計と譯したのは一面の理由があるのであつて、神聖なる隣伽と呼ばれた圓塔は拜星教に聯關を持ち天文研究にも利用されたからである。

以上の如く考へてオーブライアンは兩年鑑に現れた *Fiadh-Nemheda* 又は *Fidh-Nemeed* を以て當時鐘樓として使用されてゐた *cloictheach* とは別個の存在であり、然もそれは神聖なる隣伽を意味する圓塔の原名であると主張した。それ故彼によれば結局愛蘭土の圓塔はその起原に於て生成の源たる太陽と月とを崇拜するために建てられたものであり、且つそれは高き構造の故に指時計又は天文研究にも利用されたものなのである。

次にオーブライアンは廣く東洋各地を旅行せるヴァレンチア卿の報告に基き次の如き事實に注目した。即ちコーカサス地方のテリック河岸には一基の古き圓塔があり、その入口は横に長い形をしてはる

るが愛蘭土圓塔の入口と同様に地表面上になく、地上約十二呎の高さの所に設けられてゐた。ヴァレンチア卿はこの塔を彼がヒンドスターン地方で目撃した若干の優美なる圓塔に類似してゐると述べた。又恰も近代の愛蘭土人が自國の圓塔に就いて無智であるのと同様に近代のコーカサスの人々はテリック河岸の圓塔の來歴を知らず、従て少しも之に尊敬を拂はないが、却つて遠方のある地方から毎年參詣する巡禮者が拜火教とは異なるこの塔に聯關した古き宗教に執着して一種の儀式を營むとの事である。オーブライアンはこれらの報告をそのまま採用し、然も自らコーカサスやヒンドスターンの圓塔と稱せられるものに就いての實地的調査や正確なる研究を遂げずして、愛蘭土の圓塔も亦コーカサス地方に由來したもので、兩者とも一般生殖力の生成的根源としての太陽と月とを祭れる殿堂であり、場合によつては天文の觀測や指時計としても利用されたのだと斷定した。

オーブライアンは又希臘譯聖書の解釋が「トコロバールの高き邱」(民數記略二二、四一)と云ふ文句をバールの柱、即ち太陽に捧げられた柱なりと認めたのを正解と考へ、愛蘭土人も亦圓塔を *Bail-toir* 即ちバールの塔(太陽の塔)と呼び、且つ圓塔に出入した僧侶を *Aoi Bail-toir* 即ちバールの塔の管理者と名づけた事を述べ、殊に今尙一基の圓塔を遺存するアルドモアの地名は大なる高き所を意味するのであるから、結局愛蘭土の圓塔も亦東洋に於ける拜星教的建築物と同じ起原のものに相違ないと主張した。

圓塔初建の時代に就いて種々の説のあることは前に述べたがオーブライアンも此の問題を解決せんが

ため多くの文献を集めて調査を進め、先づ第十三世紀に「自分は圓塔の第七世紀に建てられた事を確信するが、然しこれを建てた人々の如何なる者であつたかを知らぬ」と述べしキヤムデンと云ふ人の言葉を引き合ひに出して、遅くも第七世紀には圓塔の既に存在してゐた事を認めた。他方第十三世紀と云へば島内の傳説なども相當に廣く普及してゐたらうのに、何故キヤムデンが圓塔建設の民族の如何なるものであつたかを知らなかつたのであらうか。これは圓塔初建の民族が極めて古く、第十三世紀には既に忘れられてゐたからであらうとオーブライアンは想像した。オーブライアンは又ケーシエルの僧正にして且つ古き愛蘭土に於ける第一流の學者の一人であつたビショップ・コルマックがその著作たる愛蘭語の語彙の中で圓塔を *Gaili* と呼び、且つ次の如く定義せる事に注目した。

Cartha cloacha is aire bearor gall desuider

Fo bith ro ceata suighedsat en Eire.

彼はこれを英語に意譯して

Stone-built monuments, with which noble judges used to inclose vases containing the relics of

Fo (i. e. Budd), and of which they erected hundreds throughout Ireland.

となした。これによれば圓塔は聖者の舍利を收めた壺を奉安せる石造紀念塔で、それが愛蘭土にも數百基建築されたと云ふのである。オーブライアンはこのコルマックの定義に續いてパレイラと云ふ人の報

告せるセイロン島の佛塔たるダーガバに關する記事をも引用し、以て圓塔との聯關をも説いてゐるが、この點に於て彼は甚しき誤謬に陥つたものと云はなければならぬ。セイロン島のダーガバが印度のスツーパーに起原し、共に佛敎の舍利塔として最も古き形式のものたることは云ふまでもない。然もスツーパーもダーガバも共に覆鉢形中實であつて愛蘭土圓塔との間に形式及び構造上の類似性を見出すことは出來ない。それにも拘らずオーブライアンはこれらの佛塔も亦陽物形を爲すものと想像し、更に舍利奉安の塔を生成及び生殖の象徴たる陽物形に造つたのは死者に對してその再生又は復活を祈る敬虔なる念願に基けるものだとの牽強附會の説を爲したのである。彼は又印度に於ける溼婆の傳説を研究し、溼婆の神殿に創化の力の象徴たる隣伽の祭られてゐる事、及び印度に於て最も古く建てられたパゴーダが陽物形であつた事を主張した。

一般にパゴーダと云ふ語は波斯語の *But* (偶像) と *Kadah* (殿堂又は神殿) の結合されて出來た *but-kadah* 即ち偶像の殿堂なる意味の言葉をポルトガル人が訛つて *pagode* と呼び、更にそれが歐洲諸國語に轉用されたものと見られてゐる。然るにオーブライアンは同じく偶像の殿堂を意味する波斯語 *peuti shada* を以てパゴーダの語原であると爲し、それは眞理の原則、智慧の精、最高本質等を象徴するものを納めたものであつて、ポルトガル人の考へたやうな多くの偶像を安置する殿堂ではなかつたと解した。尙彼は自國の圓塔をアイリツシュ・パゴーダとも呼び、圓塔と印度のパゴーダとの聯關をも暗示した。

彼によれば圓塔は愛蘭土語で *Budh* と稱せられるもの、即ち生殖と成長との源たる太陽を意味するのみならず、神聖化せられた男子生殖器をも意味するものに關係あり *Budh* の信者は生殖力の象徴としての隣伽を密かに崇拜するのみを以て満足せず、之を巨大な形態に表現せんと欲し、斯くて建てられたのが圓塔で、これは太陽の象徴としての隣伽を崇めるための一種の偶像崇拜の建物であつたと。

上述古き愛蘭土語の語彙の著者ビショップ・コルマックは圓塔を指して古代の遺物なりと稱したと云ふ。コルマックの在世年代については學者間に異論あり五世紀頃の人だと爲す者もあるが一般には九世紀頃であつたらうと推定されてゐる。何れにしてもコルマックの時代から見ても古代と云ふのはいつ頃の事であるかゞ問題となつた。オーブライアンは假にコルマックを九世紀の人であつたとして、それから僅に二百年位前の第七世紀を指して古代と云ふ筈もあるまいと見て圓塔は少くとも第七世紀よりは遙に古いものでなければならぬと主張した。他方又オーブライアンは四四八年にアルスター年鑑が同年に起つた地震のため五十七基の圓塔の破壊せられし由を記録してゐると云ふ事から推定して圓塔の第五世紀に既存してゐた事を確實だと信じた。けれどもこれに對して圓塔基督教の起原説の有力なる主張者たりしコロネル・ド・モンモランシーは古き愛蘭土に於て博識を以て聞え、法律、系圖、戦争、和睦、その他萬般の事柄を詩に歌ひ幾多の重要なる歴史的口傳を爲した所謂バード（遊吟詩人）が圓塔に就いて全く沈黙であつたと云ふ事實からバード達の活躍せる時代には未だ圓塔は存在しなかつたものと推論し

た。バードの活躍した時代と云ふのは基督教の愛蘭土渡來以前から第十二、十三世紀にも及んだのであつてその永き間圓塔が少しも彼等によつて歌はれなかつたとすればこのモンモランシーの推論も妥當のやうに思はれる。然るにオーブライアンはアマーデンと云ふバードの歌つた次の如き詩を示してモンモランシーの所説を反駁した。

Aonch righ Teambrach

Teamor Tur Tuadtach

Tuath Mac Miledh

Miledh Long Libearne.

この詩は英譯されて

Noble is the king of Teamor,

Teamor the Tuathan Tower,

Tuaths were the sons of Miledh,

Miledh of the Libearn vessels.

と解されたが、この中にある Teamor は Tarah とも稱せられ愛蘭土に古く侵入した Tuath-de-danaan 族の建てた異教的神殿たる圓塔のことで、宮殿を意味するのではなく、又 Tur Tuadtach はこのダナー

ン族の塔の意であり、*Milceth* は國王の名であるとオーブライアンは主張した。この詩の作者がいつ頃の人であつたかは不明であるが、基督教の渡來時代に從來の異教的信條をすてゝも最も熱心に基督教の福音を宣傳せしバードにフィーチ、コルンバ、フィナン等と共にアマーデンと云ふ名も残つてゐるので、もしこれが上述の詩の作者たるアマーデンと同一人であるとすれば圓塔の此の時代に既存せし事が明らかとなり、又同一人でないとしてもバードが圓塔に關して全く沈黙であつたと云ふモンモランシーの主張は成立しない事になる。

圓塔初建の時代及び民族に就いて種々雑多な臆説の行はれる原因の一つは何れの圓塔にもその建築主や建築技師に關する記録の残つてゐない事である。然るにこゝに只一人 *Gordan Ucer* と云ふ人物をキルマックドウ、キララ、及びアントリムの圓塔の建築技師であつたと爲す傳説がある。この人物の名はアールスター地方の古き愛蘭土語を話す農民の間では今でも親しまれてゐる由であるが果して實在の人であつたか否かも不明である。ピートリーは聖アバンの傳記を書いた或僧侶の文章を根據としてゴーバン・セーアは聖アバンと同時代の人であるから圓塔も亦第六世紀頃に出來たものだと主張した。

傳説によれば嘗て愛蘭土に石造及び木造の建築に非凡の技能を歌はれたゴーバン・セーアなる人があり、その優れたる天才の故に大なる富を得たる彼は失明して切角の富を享樂することが出來なくなつて了つた。當時宗教界の偉人であり偉大なる救世者であつた聖アバンは神の榮光のために一つの建物を捧

げんと考へゴーバンの技能を信賴して之に建築を命じた。けれども既に盲目となり不自由な生活をしてゐたゴーバンは聖者の命に従ひ難きを告げて辭退したが聖者は工事中だけゴーバンの目を開いてやるからと云つて無理に引き受けさせて了つた。斯くて聖者の不思議なる力によつて開眼せられたゴーバンは依囑された建築を立派に遂行し得たが、工事の完成と共にその目は再び失明して了つたと。

ピートリーの引用したこの傳説に對してオーブライアンは次の如き異なる解釋を下した。即ちゴーバンの目が聖アバンの命じた建築に従事してゐた間だけ開き、工事の完成と共に再び見えなくなつたと云ふのは聖アバルとゴーバンとの生存せし時代の相異せるを暗示したものであり、ゴーバンは聖者よりも遙に古き時代の人物であつたと。オーブライアンのかゝる主張の根據はクロンマックノイズに残存せる極めて古き十字架型石柱に刻まれた彫刻像に基いてゐる。その像の一つはゴーバンの姿を現したものであり、且つこの石柱は愛蘭土への初期の侵入者にしてクロンマックノイズに殖民したダナーン族の作つたものであるから、圓塔の愛蘭土に初建されたのはダナーン族の侵入から餘り遠くない時代である。

然らばオーブライアンが圓塔の最初の建設者と見做したダナーン族とは如何なる民族であらうか。從來愛蘭土の史前住民に就いては色々の説が立てられた。W・R・ワイルド（愛蘭土古傳説。ワイルド夫人編、一八八〇年、第二卷）は Firbolg なる民族を以て此の島への最初の侵入者なりと認め、次いで Danaans が侵入し、更に基督教渡來の少し前に Milesians が來り、纏て七九五年から一〇一四年にかけ

て *Norsemen* が上陸したと説いた。而してワイルドはダナーン族を以て恐らく北方ヨーロッパから愛蘭土に入り先住のファーボルグ族を征服し、之を下層階級として従屬せしめたものと見做した。又 W・フレザーは一八九一年の愛蘭土考古學雜誌の中で同國住民史を四段階に分ち、(a)傳説的人種を以て原住民となし、(b)新石器時代に屬するファーボルグ族を以て最初の侵入者と認め、(c)ケルト族はその次に此島を征服し、(d)北方種族が最後に侵入したものと説いた。フレザーは更にケルト人には種々の分派があり、その中最初に愛蘭土に侵入したのはダナーン族であつたと考へた。

かくの如く人類學者にしてダナーン族の實在せし事とその愛蘭土侵入の事實とを肯定する者も少くないのであるが、マカリスターはダナーン族を以て非實在的傳説的民族だと主張してゐる。又「愛蘭土史前人」(一九三五年)の著者 C・M・マーチンは愛蘭土に於ける初代基督教年代記に記載された四大侵入者、即ちファーボルグ族、ダナーン族、ミレシアンズ、及びノースメンの四族に就いて人類學的考察を遂げ、ダナーン族はブロンズ時代の短頭人種であつたと説いてゐる。これらの人類學者のダナーン族に就いての論究は暫く措き、オーブライアンがダナーン族を如何なる民族と解し、又それと圓塔との關係を如何に説明したかは彼の圓塔論に於ける最も重要な點の一つである。彼に従へばダナーン族が愛蘭土に侵入して先住民族たるファーボルグ族と決戦を行つた古戰場はゴールウェー郡ロー・マスクの附近と、ロスコンモン郡ロー・アランの附近とであつた。而してこの兩地は共に古き愛蘭土語で *Moy-tura*

又は Moye-tureadh と呼ばれた。この語は塔の原野を意味し、今でもこの兩地には圓塔の遺跡があると云ふ。そこで塔の原野なる地名はファールボルグ族の語であつたか、或は又ダナーン族の語であつたかの問題が吟味されなければならない。オーブライアンはこの問題を解くために兩民族の宗教上の遺跡を調査した。その結果ファールボルグ族が最初の敗北の後に避難したアラン島にはその後再びダナーン族の襲撃を受けるまでの間に建てられたと思はれるやうな石造建築の痕跡が一つも残つて居ないのに、ドウルイズ教團の遺跡が非常に多いと云ふ事實はファールボルグ族が圓塔に無關係だつた事を證明する。従てこの古戦場に塔の原野と云ふ名を與へ、又塔そのものを建てたのはこの時代又はそれ以後のダナーン人でなければならぬ。斯様に論じてオーブライアンは更にダナーン族に就いての詳細な研究を進めた。その結果によるとダナーン族は古くコーカサスから印度に亙つて實在した人種に屬し、早く波斯地方から移住して愛蘭土に殖民し、相當に高き文化を示して永く平和な生活を續けてゐたが聽てファールボルグと云ふケルト系の民族に征服され、約五十六年間その壓迫の下に屈せしめられた。然るに西紀前六〇〇年頃印度に於て婆羅門に追はれた他のダナーン族の一軍が愛蘭土に侵入してファールボルグ族と決戦を交へ再びダナーンの勢力と文化とを回復せしめたと云ふのである。圓塔はこの印度より侵入せるダナーン族の初建にかゝり、印度最古のパゴダと同様に拜星教的陽物崇拜の塔であつたと。これ即ちオーブライアンの圓塔論の結論である。

六、圓塔基督教的起原說

愛蘭土圓塔は既述の如くピートリーの研究によつて基督教的建築物と斷定せられ、それ以前及び以後に於ける幾多の反對説の存在にも拘らず、大體に於てこれが最も妥當なる解釋であるとして一般に肯定されてゐる。けれどもピートリーは決して圓塔基督教的起原説の創唱者ではなかつた。彼の主張を單にコロネル・ド・モンモランシーの所説の焼き直しに過ぎぬと稱したオーブライアンの批評は過酷であつたとするも、少くともピートリーがモンモランシーによつて大に影響された事は否定出來ないであらう。然らば圓塔に關するモンモランシーの説は如何なるものであつたらうか。

モンモランシーは第一に次の如き疑問を發した。即ち假に圓塔の建築者が基督教渡來以前の極めて古い時代の人々であつたとするも、彼等は石造建築に餘程優れた技術を有する者でなければならぬ。かかる技術を持つ人々であれば單に圓塔のみならず住宅、宮殿、城廓、その他公私の有要なる建物を同様に堅牢無比の構造と爲すに何の困難をも感じなかつた筈である。然るに今日圓塔の附近に基督教渡來以前の住宅、宮殿、城廓等の斷片すら残つてゐないのは何故であるか。換言すれば圓塔も亦その附近に現存する基督教建築物の遺跡と同時代のものと見なければならぬ。第二に往古の愛蘭土に於て年代記編者の役割を演じたバード達は圓塔について何の言葉も残して居ない。従てバードの影響を受けた古き

時代には圓塔は未だ存在せず、更に基督教渡來以前の愛蘭土人にも圓塔は全く知られてゐなかつたと。第三に希臘の地理學者ストラポーンをはじめポンポニウス、メラ・ソリヌス、ディオドロス・シクルス等古代の學者は當時の愛蘭土及びその住民の状態を野蠻であつたと述べて居り、従て未だ組織的に石造建築物を造る技術に無智であつた當時のブリトン人やゴール人等の近隣民族と同様に古き愛蘭土人があの立派な圓塔を建てたとは考へられないと。第四に愛蘭のクロムレック、又はドルメンを調査すると殆ど常にその附近に非常に氣味の悪い陰慘な洞穴の在るのを見出すが、圓塔の附近にかゝる洞穴は發見されない。而してドルメンはケルト人に起原し、洞穴はフェニキア人の遺跡であると斷定し得るとするも、圓塔はこれら兩時代の何れとも關係あるものとは考へられないと。第五に圓塔がヴァランサー卿の説きしが如き異教的なパールの殿堂であるとか拜火教の殿堂であるとかと考へるのは根據なき臆測に過ぎず、結局圓塔は純然たる基督教的建築物でなければならぬと。

以上の如く論じてモンモランシーは圓塔の異教的なる事を否定し、更に次の如き結論を下した。即ち圓塔の建築者は第五世紀及び第六世紀に愛蘭土に於て基督教の布教を爲せる傳道者達に先立ち、又は伴はれて、希臘及羅馬よりこの島に渡來せし僧侶及び巡禮者であつたと。換言すれば第五世紀の末頃神學研究のため羅馬に滞在せし聖アバンが歸國に際し希臘及び羅馬の宗教家百五十人を同伴せしも、當時異教國であつた愛蘭土ではこれらの宗教家を十分に活用することが出来なかつたので圓塔の建築に従事せ

しめたのではあるまいかと云ふのである。

次に愛蘭土圓塔がその起原を何處に發したかと云ふ問題に對してモンモランシーは紅海から僅か一日で到達し得るゲーベル砂漠に近きコルヅウム山のコプト人僧侶の僧院こそは直接的本源であると主張した。この僧院には聖アンデレ、使徒ペテロ及びパウロ、聖マケアに夫々捧げられた二つの教會堂があり、何れも極めて簡單なる建物に過ぎなかつた。又これらの教會堂の附近には暗い汚い食堂や來客を迎へるための稍々清楚な室も設けられてゐたと云ふ。かゝる建築群より成るこの修道院の中央の中庭には石造方形の塔が獨立的に建てられて居り、コプト教徒はこの塔の中に一切の寶物や貴重品を保存し、塔への出入には引橋をかけ、一朝アラビア人の掠奪的襲撃を受けた場合にはその引橋をはづして内部に立籠り投石して之に應戰したものと考へられてゐる。

圓塔の本源をコプト教徒の方形塔に求むる事は一應承認し得るとするも一方が方形であり、他方が圓形である點を如何に説明したであらうか。モンモランシーはコプト教徒のはじめて砂漠に僧院を建てた頃はその塔も圓形であつたが、後に方形に變つたのであり、又歐洲の封建時代には再び圓形が流行して各國領主の居城にまでも圓塔が附屬せしめられるに至つたのだと説いた。

モンモランシーの圓塔に關する所説は大體上述の如くであるが、この説に影響されたと云はれるピートリーの見解は如何なるものであらうか。

ピートリーはその著「愛蘭土の宗教建築」(一八四五年)に於て先づ圓塔の用途に關し從來唱へられてゐた諸説を點檢して次の如く分類した。

A 異教的起原説

(1) 拜火教の殿堂、(2) ドウルイズ教團の祭禮を宣言する場所、(3) 指時針又は天文臺、(4) 陽物崇拜の塔

B 基督教的起原説

(1) 隱遁者の塔、(2) 懺悔者の牢獄、(3) 鐘樓、(4) 城砦又は僧院の寶庫、(5) 望樓又は標識塔

かゝる分類を試みてそれに對する論評を爲したピートリーは次の三つの結論を示し、これを以て最早疑なき正解だと主張した。

一、圓塔は基督教的起原のもので第六世紀から十三世紀に至るまでの間に建てられた。

二、圓塔は次の二様の用途に適するやうに設計された。即ち第一には鐘樓として使用するため、第二には城砦、即ち外敵に對する強固なる抵抗の場所、として使用し、神聖なる器具、書籍、遺寶その他の貴重品を收め、且つ突然の掠奪的攻撃を受けた場合にはこの塔の所有者たる僧侶達が安全に遁れ得るやうに造られた。

三、圓塔は恐らく必要に應じて標識塔及び望樓としても使用された。

この結論は結局ピートリーが從來既に多くの考古學者によつて斷片的に主張されてゐた諸説を綜合し

たものであつて、彼は更にこれを證明する根據として次の諸項を擧げた。

一、圓塔が基督教的起原のものである理由

(イ) 古代の教會堂的建築物と無關係に圓塔の建てられた例が見出されぬ事

(ロ) 圓塔の附近に今でも古い最初からの教會堂の遺存してゐる場合、それらの教會堂の中に見出されないやうな建築的特徴を圓塔の建築様式が一つも示してゐない事

(ハ) 圓塔は異教時代のものと確定された愛蘭土の何れの建物の中にも決して見出されぬやうな特色を必ず持つてゐる事

二、圓塔の鐘樓及び城砦としての用途に就いて

(イ) 圓塔の建築上の構造がこの結論を著しく助けるやうに出來てゐる事

(ロ) 愛蘭土に於ける年代記その他信賴し得る文書から引用される多くの文章が、圓塔の常にこの兩様の目的のために利用された事實を證明してゐる事

三、圓塔が時には標識塔及び望樓として使用されたらう事に就いて

(イ) かゝる假定を極めて有り得べかりしものとするに足る歴史的證據がある事

(ロ) 基督教の渡來せし時代には標識塔及び望樓に對する必要のあつた事、又圓塔がかゝる目的によく適合するやうに造られてゐる事

以上がピートリーの圓塔基督教的起原説の要約であつて、これこそは愛蘭土ロイヤル・アカデミーが定説として採用したものであつた。

七、圓塔と教會堂

圓塔基督教的起原説の最も重視する點の一つは圓塔がすべて教會堂又は僧院の附近に建設されてゐたと云ふ事である。事實愛蘭土に現存する圓塔及びその廢墟の多くは基督教的會堂又は僧院の遺跡に近接してゐるのであるから、圓塔がこれらの基督教的建築物に附屬したものであらう事は一應肯定せざるを得ないのである。私もグレンダロウの盆地に於て第六世紀の聖ケヴィンの僧院生活を偲び、その後相次いで建てられた小拜堂、伽藍、僧院等の所謂「七つ寺」の遺跡累々たる中に獨り超然と高く聳える大圓塔を仰いだ時にはピートリーの所説の正しかるべきを承認せざるを得なかつた。けれども同じく私の視察したアントリムの圓塔には少くとも現在その附近に教會堂その他の基督教的建築物の遺跡すら見出されず、従てこの塔が教會堂又は僧院の附屬物であつたか否かを疑はしめるのであつた。この疑問に對してはピートリーの説きし如く塔の入口の上枠の石塊表面に刻まれた圓形十字架様の浮彫を指摘して、これこそはこの圓塔の基督教的建築物たりし證據であると主張することも出来ないではない。けれどもこれ

に就いては前掲の「古代愛蘭土の塔と殿堂」なる著書に於てマーカス・キーンが述べた説、即ち十字架の刻まれた石塊はこの塔に最初から存してゐたのではなく、後世の改修に際して挿入されたものであると云ふ主張も無視するわけにはゆかない。もしキーンの説が正しいとするならば、又十字形の模様そのものがオーブライアンの主張する如く必ずしも基督教的記號に限らないとするならば、ピートリーの論證は成り立たなくなる。

キーンやオーブライアンはピートリーとは反對に圓塔と教會堂との必然的關係を否定する立場に立ち圓塔を以てその附近に遺存する教會堂の遺跡よりは遙に古い異教的建築物だと主張し、建築材料や構造の上に於ける兩者の時代的相異を指摘してゐる。然らば何故に古き異教的圓塔の附近にわざ／＼新しく基督教の會堂や僧院が建てられるに至つたのであらうか。この疑問に對してオーブライアンは答へて云ふ。恐らく愛蘭土に於ける初代基督教傳道者達は在來の異教徒を基督教の信仰に改宗せしめんとするに際し、既存の先入觀念を無視することなく、寧ろ之を或程度まで尊重し、且つこれとの融和を計りつゝ、布教の目的を達せんとしたのである。この意味から云へば異教の靈地たる圓塔の附近に新しく基督教の會堂が建てられたとしてもそれは少しも不思議ではない。このことは愛蘭土に多く残つてゐるドルメンや日神禮拜の穴ミスラテイクの如き異教的遺跡ケープの附近に古い教會堂の跡の認められるに徴しても肯定出來ると。斯くの如く圓塔と教會堂との關係に就いては肯定否定兩様の意見が對立してゐて第三者をしてその何れが正

しきかを判断するに困難を感せしめるのであるが、愛蘭土に現存する圓塔及びその遺跡を以て悉く第六世紀以前の古き時代のものと見做すのは無理である。けれども圓塔の眞の起原が果して基督教的のものであつたか、或は異教的のものであつたか、の問題は尙ほ慎重なる研究の餘地を残してゐるのではないかと思ふ。

グレンダロウ圓塔の附近に多くの基督教的建築物のあつたことは今尙盛に發掘されてゐる遺跡によつて明かに示されてゐるが塔はいつの頃からか多くの墓石によつて圍繞され、教會の塔と云ふよりは寧ろ墓地の塔の如き景觀を呈してゐる。私は苔蒸した幾多の墓石の間に恰も無數の死者の眠る墓地の守護者の如くに巍然として立つ圓塔を見て圓塔墓地照明塔説とでも稱し得べき一つの見解を想起せざるを得なかつた。聞く所によれば佛蘭西のポアトウには *Fanal de cimetière* 又は *Lanternes des morts* と稱せられる燈臺に似た小塔又は單に照明用のランプを戴く柱が墓地に建てられてゐると云ふ。此の種の小塔は佛蘭西にも獨逸にも十數基遺存し、何れも中世紀の聖者の墓にランプを點じて敬意を表した習慣の名残と解せられてゐる。又この風習は遠く羅馬時代にもあり、更に中世以後には回教徒の間にも行はれたものだと云ふ。今ファーガスン（前掲、古代中世建築史、第二卷）によればこの種の墓地照明塔と愛蘭土圓塔との類似性を指摘した最初の人はホツダー・ウエストロップであつた。ファーガスン自身は圓塔に窓の少いこと、又かゝる用途のあつたらしい傳説が愛蘭土に残つて居ない事、等から考へてウエストロップ

ブの指摘を無條件に肯定することは出来ないと言ひ乍ら、尙ウイトン附近のクロスター・ノイブルグの墓地に在る死者の照明塔トートンロイヒターを紹介し、形式及び規模の著しく異なるに拘らず、目的に於て愛蘭土の圓塔とこの種照明塔との間に一脈の連絡あるべきを暗示した。クロスター・ノイブルグのトートンロイヒターは一三八一年に建てられ、高さ約三〇呎、入口は地上約五呎の高さの所に設けられ、且つ頂上に近き硝子張りの窓六個を有する小室には常に燈火が點せられたものと云ふ。ウエストロップ及びファーガスンに依て注目されたこの種墓地照明塔と愛蘭土圓塔との類似性はその後殆ど誰れにも言及されず、圓塔研究者にしてこの問題に觸れた者はないやうである。それ程この類似性は稀薄なものであるか、或は又ほんの思ひつきに過ぎぬ事だつたのであらう。

八、圓塔と鐘

圓塔が、ピートリーの説く如く、基督教的起原のものであり教會堂又は僧院の附屬建築物だつたと解する場合、その用途が鐘を吊すことにあつたらうとの考は伊太利のカムパニールをはじめ歐洲諸國の教會堂附屬の鐘塔を聯想する者の等しく懐く所であらう。この考は廣く一般に肯定せられ、J・R・オーコンネルの「グレンダロウ、その傳説及び遺跡」と題するパンフレットを見ても愛蘭土の圓塔は平和な時には鐘樓として、又劫略隊の突然の襲撃に對しては避難兼防禦の場所として用ゐられたものと斷定

されて居る。更に此處で朝に夕に鳴り響く鐘の音はグレンダロウの谷と丘に住む人々を祈禱と頌榮とのために集め、又スカンディナヴィアの掠奪團やノースメンがこの平和な谷に襲來した時は、教會所藏の聖器や寶物はこの難攻不落の塔内に隠されたものだとも書かれて居る。そこで次に圓塔が果して本來鐘樓であつたか否かに就いて述べて見やう。

圓塔が、少くとも、後世に於て、鐘樓として使用されたのは否定し得べからざる事實である。圓塔は多く平地や谷間などに建てられたものであつて、その最上階に吊された鐘の音は山や丘の上に建てられる鐘樓の場合よりも廣範圍によく響きわたつたものである。けれども圓塔が最初から鐘を吊すために建てられたものであつたか否かは頗る疑問とされて居る。例へばブラッシュがキルマックドウの圓塔について説明した場合、その最上階の窓の臺石から上の内壁が非常に拙劣な築き方を示し、又その邊には多くの損傷が残つて居ると云ふ事實を指摘して、これは恐らく最初鐘樓でなかつた圓塔を後に鐘樓に改めたときの加工の痕跡だと云つたのを見ても、少くともキルマックドウの圓塔に就いては斯うした疑問が存するのである。同様の記事はブラッシュがアルドモアの圓塔の最上階に於ける窓と窓との間の壁の一部づゝ切り取られてゐるのを見て、これは鐘の動搖に適した空間を作るため後に擴げられた跡であると述べた所にも見出される。これらの記事が正しいとするならば、圓塔は最初は鐘を吊すための塔ではなかつたと考へざるを得なくなる。同時に又少くとも後世になつてから圓塔が鐘樓として使用されたこと

も證明されるわけである。

圓塔鐘樓説は、オーブライアンも云ふ如く、愛蘭土社會史の著者ジョイスが「圓塔のゲール語の名は cloitheach 又は cloigtheach であり、cloie 又は cloig は鐘を意味し、Enech は家を指すのだから、結局鐘樓に相當するのだ」と述べてゐる點でも一應尤もらしく思はれる。然るにこれに對して圓塔の最初に築かれた古き時代には未だそこに吊す程大きな鐘はなく、僅に手^{ハンド}で振る鈴^{ベル}が用ゐられてゐたに過ぎないから、圓塔鐘樓説は誤りだと主張するものもあつた。この疑問を免れる爲かオーコンネルは cloie を以て塔内に吊される大鐘を指稱するのではなく、ハンド・ベルの事であつたと解し、ハンド・ベルは當時教會堂に於ける儀式に使用された聖器の中最も大切なものとされてゐたから、一朝有事の際に塔内に隠して守護すべき一切の寶物及び貴重品を包括的に cloie と呼ぶこともあつたのだと主張した。マカリスターも亦圓塔は最初中世及び近代の基督教會堂附屬の鐘塔に於て見られるが如き大鐘を吊すための塔ではなかつたと考へ、寧ろハンド・ベルを振り鳴らす人が塔の最上階へ昇り四方に開く窓を通して成るべく遠くまで音響を傳へんとするために使用したのだと云つて居る。尙これらの説と多少重複する所もあるが次の如きマーチンの説明も注目に價する。

「圓塔は明かに鐘樓として使用すべく不適當であつた。何となれば塔壁に設けられた開口は小さな狭間窓たるに過ぎず、鐘の音響を傳播する程の大きさのものではないからである。その上これら圓塔の建築

された時代には未だ大きな鐘は發明されてゐなかつたやうである。愛蘭土に於て初期教會堂で使用された鐘は近代スイスの牡牛の頸鈴に似た小さなものであつた。然もこれらの鈴は教會の持つ貴重品の中でも恐らく最も大切なもの神聖なものと思はれて居たので、この鈴を大切に隠す場所と云ふ意味で圓塔を鐘樓とも名付けたものと思はれる。その後ノースメンの侵入の危険が去つてから、圓塔は初めて眞の意味の鐘樓として使用されるやうになつたのである。」

以上の諸説によつて圓塔鐘樓説の根據の薄弱なる事は大體明になつたと思ふ。結局圓塔は最初から、又終始、鐘樓として使用されたのではなく、一時又は後世になつてからかゝる目的に利用されたものと考えなければならぬ。

九、圓塔と城砦又は寶庫

マカリスターは一方に於て圓塔がその當初に於てハンド・ベルの音を遠方に響かせるために使用されたことを主張したが、他方では又ノースメンの愛蘭土侵入に對して必要となれる避難所又は寶庫であつた事を力説してゐる。彼によればノースメンの襲撃を恐れた時代に人々は圓塔の最上階に番人を立て、四方の窓によつて絶えず見張りを爲さしめ、怪しき者の迫り來るを發見すれば直に警報を發せしめた。而して警報を聞いた人々は直に僧院や會堂の聖器や寶物を塔内に運び固く守護するのであつた。然るに

攻略者も度々の襲撃の経験によつて遂に強固なる塔の入口を破壊して内部に闖入することも出来るやうになつた。そこで防禦者は入口を地上よりも遙に高き位置に設けて敵を防ぐやうにした。現に愛蘭土南西岸シャノン河口にあるスキヤッテリー島の圓塔は地表面に接する入口を持ち、然もこの塔は石の積み方から見て圓塔中最古のものに屬する。かくて愛蘭土圓塔は最初には入口を高く設けたのではなかつたと推定せられ、又入口が高められてからは流石の攻略者も容易に塔内に闖入するを得ず、切角攀ぢ登つて來ても防禦者は塔の窓から投石して敵を打ち落して了つた。そのため防禦者は平時に於ても常に小石を無數に塔内に蓄藏した。このことは近代に於ける圓塔の修理や發掘工事に際して塔内の朽ちた床から多くの小石の發見されることに徴しても證明される。他方又入口の戸は鐵板を張つて固められたらしい。尙ほ現にレイクス郡ティマホーの圓塔の入口臺石の下に塔壁を通貫する小孔が残つてゐるが、これは恐らく塔に攀ぢ登るために攻撃者が掛ける梯子を防禦者が内部から棒を挿し込んで突き倒すために用ひた孔であつたらう。かくて圓塔は避難及び防禦のための城砦として當時は全く難攻不落だつたのである。

右の如きマカリスターの主張は要するに圓塔を以て外敵の襲撃に對する避難所又は教會の貴重品を隠すための寶庫だつたと見做すのであつて、これは塔の構造、特に入口が高い所に設けられ、内部から梯子を引き上げて了へば外部からは容易に登ることが出来なくなると云ふ事實から推定したものである。けれども圓塔が果してかゝる目的で最初から建てられたか否かに就いては疑を容れる餘地がないではな

い。何となればモンモランシも云ふ如く僅に十二人位の大の男が辛うじて入り得るに過ぎない圓塔のことであるから、多數の人々が最後の據り處として立籠るには餘りに狭きに失するし、又貴重品を隠す場所としては建物そのものが、餘りに人目を引き易くはないかとも考へられるからである。圓塔はその堅牢にして難攻なる點では無比であつたかも知れない。又弓矢などで攻撃されたとするも圓塔が方形塔に比して有利であることも認められる。乍然寶庫又は避難所としての用途が圓塔の初建時代からの目的であつたか否か、これも亦劇に斷言し難き問題である。勿論事實に於て圓塔が亂暴なる蠻民の攻略に際して防禦上極めて有効であつたらう事は想像されるけれども、それは寧ろ附隨的又は偶然的効果ではなかつたであらうか。

マーチンも亦圓塔と教會堂との關係を重視する立場から、教會が外敵に襲はれた場合その聖器や偶像を直に移し隠すために圓塔は會堂の附近に建てられたと説いてゐる。又彼に従へば大砲の未だ使用されなかつた時代のこととして圓塔は殆ど不落の堅城であり、ノースメンの襲來があれば直に教會堂の貴重品を塔の中に隠し、老人や病人の如き活動不能の人々を少數だけ塔内に残し、他の屈強なる者は悉く逃げて了つた。圓塔は教會堂又は僧院の附近に在るとは云へ、それらの建物の火災に際し少くとも類焼を免かれ得る程度の距離に建てられた。これ圓塔が教會堂に密着してゐない一つの理由であらう。又初期ケルト人の教會堂は何れも頗る小規模であつて到底重い石造の塔を屋上に置くことは出来なかつたと云ふ

ことも塔と教會堂との離れて建てられた一つの理由であると。私はマーチンのこの推測に對しても多少疑なきを得ない。例へばグレンダロウに現存する聖ケヴィン教會（聖ケヴィンの臺所と稱される）は近世の修理と改造とにより大に變容されたとは云へ、長さ二二呎八吋、幅一四呎七吋の身廊とその屋上に設けられた高さ約二〇呎二吋の小圓塔との密着を示し、小教會堂の上に石造圓塔を建てることの強ち不可能にあらざるを語つてゐる。又もしノースメンの侵入以前に圓塔が存在して居たとすればマーチンの説は成立し難くなる。彼は圓塔を以て第九世紀から十世紀の初期に初建されたものと斷定してゐるが、それはノースメンの侵入と云ふ歴史的事實を根據と爲し、これと對應させるために立てた假説であつて、圓塔を以てこの歴史的事實とのみ關係せしめて考へることは妥當ではないかとも思はれる。

十、使用参考文献

1. O'Brien, Henry : The Round Tower, 1834.
2. Petrie, George : The Ecclesiastical Architecture of Ireland, 1845.
3. Keane, Marcus : The Tower and Temple of Ancient Ireland, 1867.
4. Brash, Richard Rolt : The Ecclesiastical Architecture of Ireland, to the Twelfth Century. 1875.
5. Fergusson, James : A History of Architecture in all Countries, Vol. II (Ancient and Medieval),

1893.

6. Cochrane, Robert : The Ecclesiastical Remains at Glendalough Co. Wicklow. Extract from the Eighteenth Annual Report of the Commissioners of Public Works in Ireland. 1911—12. Revised 1925.
7. Ronan, Myles V. : Guide to Glendaloch.
8. O'Connell R. : Glendaloch, Its Story and its Ruins.
9. Macalister, R. A. S. : Ancient Ireland, A Study in the Lessons of Archeology and History, 1935.
10. Martin, Cecil : Prehistoric Man in Ireland, 1935.

註、當時蘇格蘭土は Alban, 愛蘭土は Scotia と呼ばれてゐた。従て Scotos は愛蘭土人を意味した。